覚醒

那須川天心

kraken

覚醒

目次

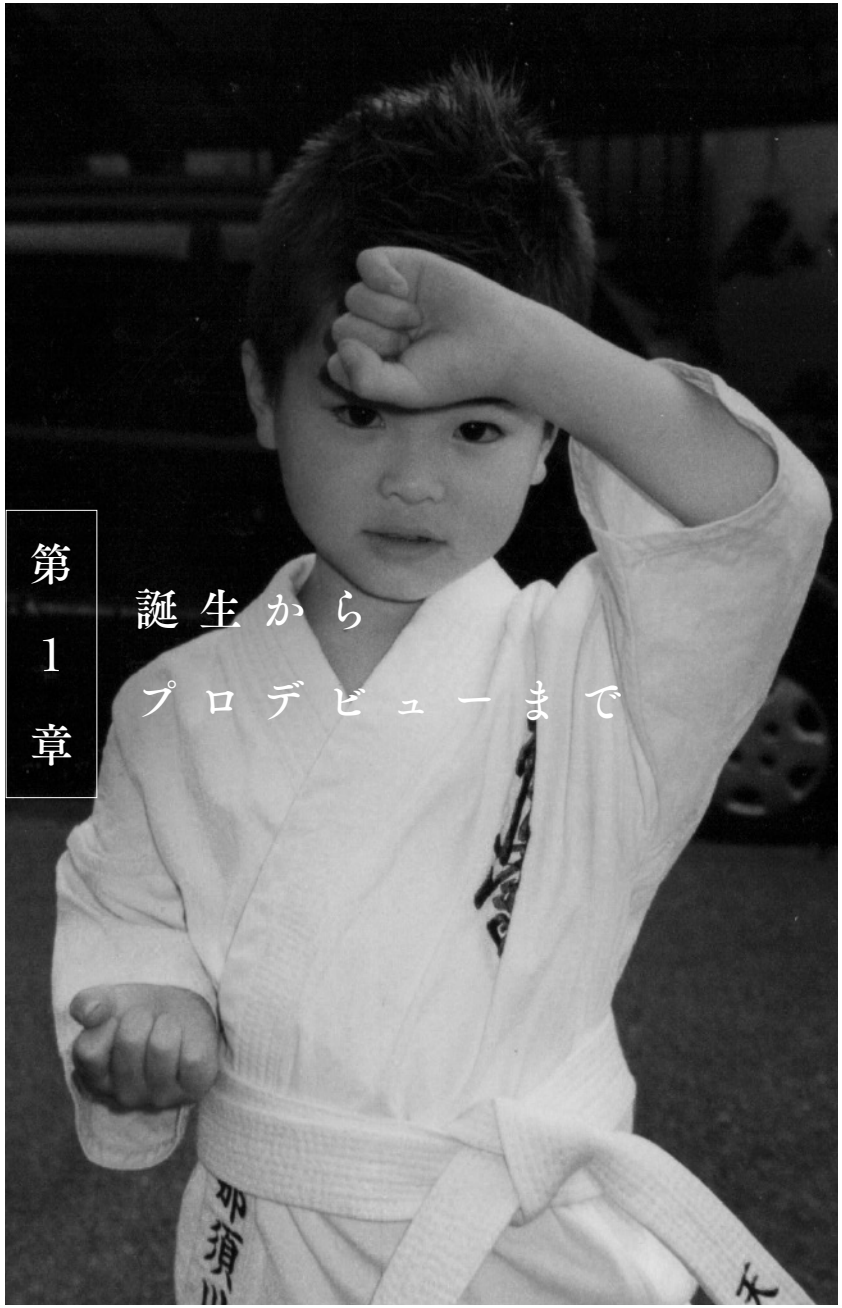
第1章 誕生からプロデビューまで

天に心を持て……6
父親の運動神経と母親のメンタル……7
プレッシャーは感じない……9
近所の空手道場へ……12
受け継がなかったサッカーの才能……13
父親との特訓漬けの日々……15
打撃は急所だけ狙う……17
空手のライバル・南原選手……18
決勝戦の涙……21
空手からキックへの転向……24
平本蓮との出会い……26
楽しく強くなれた理由……30
TEAM TEPPENの誕生……31
4年制の高校へ進学……33
TARGETに所属……37
練習の質は納得感で決まる……38
15歳でプロデビュー……41

※対戦相手のランキング・王者表記は当時のもの。
本文中の( )内の王者表記は2017年10月現在のもの。

第2章 キックで世界制圧へ

証言Ⅰ　那須川弘幸・由美子夫妻……44
証言Ⅱ　友達座談会……54
【キック1戦目】vs有松朝……60
【キック2戦目】vsアレクサンドロ・ヒデオ……65
【キック3戦目】vs九島亮……70
【キック4戦目】vsキム・ジンミン……73
【キック5戦目】vs藤本昌大……75
【キック6戦目】vs村越優汰……80
【キック7戦目】vs鈴木真彦……85
【キック8戦目】vs小笠原裕典……87
【キック9戦目】vs内藤大樹……90
【キック10戦目】vsマイク・アラモス……94
【キック11戦目】vsマノリス・カリシス……98
【キック12戦目】vs宮元啓介……101
【キック13戦目】vsフレッド・コルデイロ……104
証言Ⅲ　伊藤隆（TARGETジム会長／RISE代表）……107
証言Ⅳ　菅原勇介（TARGET本部代表／トレーナー）……116



第1章 誕生からプロデビューまで

第3章 キックとMMAの二刀流

【キック14戦目】vs タリック・トッツ …… 122
【キック15戦目】vs リン・ビン …… 124
【キック16戦目】vs 村越優汰 …… 127
【キック17戦目】vs ワンチャローン・PK・センチャイジム …… 129
【MMA1戦目】vs ニキータ・サプン …… 134
【MMA2戦目】vs カウイカ・オリージョ …… 139
【キック18戦目】vs アムナット・ルエンロン …… 143
【MMA3戦目】vs フランシスコ・ギリオッティ …… 147
【キック19戦目】vs ライアン・シェーハン …… 150
【ミックスルール】vs 才賀紀左衛門 …… 153
【キック20戦目】vs ウィサンレック・MEIBUKAI …… 159
【MMA4戦目】vs 藤田大和 …… 162
証言V　岡本祐爾（TEPPEN GYMトレーナー） …… 167

最終章 これから

秒殺の極意 …… 176
減量について …… 179
RISEの絶対王者として …… 181
後輩・ライバルとの交流 …… 183
ビビり屋であること …… 184
格闘技を覚醒させる …… 186

天に心を持て

１９９８年8月18日、千葉県松戸市で僕、那須川天心は生まれた。

父は弘幸、母は由美子。僕の下には妹ふたりと弟がいて、４人兄妹の長男。

名前の「天心」は父親が考えた。意味は「天に心を持て」。天のような大きな心を持ち、感謝の気持ちを忘れない人間になってほしいという思いが込められているそうだ。

僕はこの名前をすごく気に入っている。名字が珍しくて下の名前は普通の人はけっこういるけど、僕は両方、珍しい。どこにでもある名前は嫌だし、今なら派手さの面で名前負けはしていないと自分では思っている。

近所の飲食店に漢字も一緒のお店があったので、母親は「中華屋じゃん」と最初は思ったそうだが。

僕は怖くて厳しい父親と、バランスを取るかのように優しい母親に育てられてきた。ただ、父親は家にいる時はごく普通。冗談も言うし、機嫌のいい時もあれば悪い時もある。サッカーで全国優勝の経験があるくらい運動神経が良く、僕は球技がそれほど得意ではないのでうらやましい。

僕が全く似なかったのは、繊細な部分。試合前にナーバスになることもあるし、音が気になって飛行機の中では一睡もできないらしい。

父親が苦手なことは、混雑や並ぶこと。家族で初めてディズニーランドに行った時に、あまりの混雑にアトラクションに1個入って「もうダメだ！ 帰るぞ！」となったことがあるほどだ。ちなみに、僕は友達や家族となら割と並ぶのも楽しいタイプ。早く入れるファストパスがあれば、迷わず買ってしまうほうだが。

父親の運動神経と母親のメンタル

一方、母親はメンタルが強くて、大舞台とか大人数の前でも全然物怖じしない。き

っと僕は、父親の運動神経と母親のメンタルを受け継いだのだろう。

母親のメンタルについて、関係者の間でよく話題になるエピソードがある。僕の祝勝パーティーを開催してもらった時、母親が「松田聖子のモノマネをする」と言い出したのだ。

ドレスに着替えて化粧して「私のショーだ」と言わんばかりになりきって、来場者にも握手してまわる。「僕のパーティーだから！」と僕がツッコんで終わったけど、本人はまだ歌い足りない様子で。「うちの母親はすごいんだな」と思った瞬間だった。

少し、兄妹の紹介も。4兄妹で僕が一番上だから、妹や弟の面倒もよく見ていた。今でも小さい子の面倒を見るのは好きだ。

1歳下の妹は、以前は空手をやっていて、僕と一緒に父親の特訓を受けていたこともある。4歳下の妹は格闘技のセンスがあって、たまにアマチュアの試合に出ることもあるが、本人はバドミントンに夢中（ちなみに、バドミントンで勝負して僕が勝てれば、格闘技を本格的にやる約束をしている。いつになるかはわからないが）。一番

下の弟は、キックよりもボクシングに興味が出てきたようだ。

昔は兄妹喧嘩を多少したけど、バチバチやりあったことはなかった。特に上の妹とはずっと一緒に稽古していてお互いに疲れていたので、口喧嘩くらい。

例外が一度だけあって、空手に行く前に歯を磨きながら上の妹にちょっかいをかけたら、機嫌が悪かったのかいきなり横蹴りが飛んできて、運悪く、僕の口の中に歯ブラシが刺さってしまった。

そのまま抜けずに病院に行って手術した。あとちょっとズレていたら神経に届いていたそうだ。そもそもちょっかいをかけた僕が悪いのだが、あれは危なかった。

プレッシャーは感じない

チャンピオンになってから「どんなふうに育てられたの？」と聞かれることが増えた。僕は幼少期に父親の空手の特訓が本格化して以来、格闘技漬けの日々を過ごし

ている。

父親のプレッシャーは本当にすごかった。

タイトルマッチや大舞台の試合の重圧ですら、父親のプレッシャーと比べると大したことはないと感じてしまう。

父親に怒られる原因で一番多かったのは、試合内容のこと。負けたら怒られるのはもちろんだが、優勝しても試合内容で怒られた。いつもの動きができていないからだ。

空手時代は、僕はほぼ毎週試合に出場していた。疲れていたとしても、動きの悪さに対して言い訳をすることは絶対に許されなかった。

試合中はもちろん、練習中も「疲れた顔」を少しでも見せたら「おい！」と父親から気合いを入れられる。

もちろん、僕も「疲れた顔」は見せないようにしていたが、父親にはよく「お前は顔に出しすぎだ」と言われていた。

父親は、叱る時はグーだった。手加減はされているが、グーでガツン、と殴られる。僕は動体視力が良いので、グーが飛んでくる軌道は見えているけど、完璧に避けると余計に怒られてしまう。

とはいえ、まともにグーを受けるとものすごく痛いから、当たる瞬間に少し顔を動かしてダメージを軽くしていた（この技術は今、格闘技で存分に生かされている）。

ただ、怒られたのは中学までで、プロデビューしてからはほとんどなくなった。僕も少し大人になったと、父親が認めてくれたからかもしれない。

父親自身も「親子じゃなかったらできない」と認めるほどの練習漬けで育てられたので、もちろん小さい頃はキツかった。でも、厳しくされたからこそ今の僕があるのは間違いない。

父親は内装を手がける職人であり、独立して会社を経営しているが、仕事をセーブして僕につきっきりで格闘技をほぼ毎日一緒にやってくれている。小さい頃からずっとだ。「普通はそこまでできない」と言われるし、僕もそう思う。

だから、父親には感謝しているし「尊敬する人は？」と聞かれたら必ず「父親です」と答えている。

近所の空手道場へ

小さい頃の生活について思い出してみると、一番古い記憶は5歳の時。

父親に「空手をやれ」と言われて、道場に入った。それが嫌で嫌で、よく逃げ出したのを覚えている。

毎回ではないけど、練習が本当に嫌な時は道場から外に飛び出して、走って逃げ出した。結局は、道場の師範に捕まって、連れ戻されるのだが。

自分が「やりたい」と思って始めたわけではなくて、父親に言われて始めたので、しばらくは「なんで空手をやらなきゃいけないんだろう？」という気持ちが強かった。

僕は「やらされること」が本当に嫌で、自分で選んで納得しないとやりたくないのは、昔からなのかもしれない。

道場では礼儀を厳しく教わった。同級生たちと比べて、僕は上の世代の方たちと接することが多いので、早くから礼儀を学べたのは良かったと思う。

僕は今、ジムで子供のクラスを指導しているが、挨拶などの礼儀は同じようにきっちりと教えるようにしている。稽古を始める時は最初に正座をして、稽古の内容と目標を確認する。その後、お互いに挨拶して、見学している父兄の方にも挨拶をしてから練習を始めている。

自分が教わって役立ったものは伝えていきたいし、今はよくわからなくても「格闘技をやっていたから、礼儀が身についた」と後から思ってもらえたら、それで十分だ。

受け継がなかったサッカーの才能

空手を始めたばかりの幼稚園時代は、まだ練習日が少なかったので普通に近所で遊ぶことができた。友達と球技をしたり、鬼ごっこをしたり。ゲームはそこまでやらず、どちらかというと外で遊ぶのが好きだった。

サッカー教室にも友達と一緒に入って通ったことがある。
ただ、僕がキーパーをやっているのを見た父親は、サッカーのセンスはないなと思ったらしい。父親はサッカー経験者なので、僕の球技のセンスが人並みなのがすぐにわかったようだ。
だからサッカー教室は一瞬だけ通って辞めてしまった。

球技はそれほどでも、父親譲りの運動神経のおかげで、マット運動や陸上競技で他の子に負けることはほとんどなかった。
小学校のマラソン大会は6年連続1位。ただ、長距離が得意というよりも、とにかく負けるのが嫌で自分の前を走られたくなかった。
短距離も小学校の頃は1番だった。学校を代表して陸上大会に出る話もあったが、僕は空手で忙しくてそれどころではなく、大会に出ることはなかった。

小学校で印象に残っているのは、大島先生。スポーツが大好きな女性の先生で、5

〜6年生の時に、僕の空手の試合も何度か見にきてくれた。僕の練習の大変さが伝わっていたのか、毎回、遅刻ギリギリで登校することが多かったにもかかわらず、あまり注意された記憶がない。
今考えると、練習漬けの毎日の中で、大島先生に甘えていたのだと思う。

父親との特訓漬けの日々

格闘技漬けの今の生活が始まったきっかけは、幼稚園の頃、初めて出た大会で負けて、父親が「あれじゃダメだな」と言ってからだ。
やるからには、とことんまでやる。父親は中途半端が嫌いなので、それから家で少しずつ空手の特訓を受けるようになった。
初めて出たのが関東大会で、次に出た県大会では特訓の成果が出てオール一本勝ちで優勝。5〜6人に勝った記憶がある。勝ち進んで優勝したことが嬉しくて、そこから「空手は面白い」と思うようになった。

僕は格闘技以外のことで、両親から注意されたことはない。「テストでいい点をとれ」とか「勉強しろ」とか、そういうのは一切なかった。

その代わりに、小学校に上がる頃には、空手の練習が毎日だった。道場がない日は家で父親と練習。つまり、みんなが遊んでいる時に、僕はずっと空手の練習をしていた。

今の僕はキックボクサーとして「神童」「天才」などと呼ばれることがあるが、自分では全くそう思っていない（そもそも神童の意味がよくわかっていなかった）。現実は、小さい頃から毎日練習をしているだけだ。空手やキックボクシングに限らず、どんなスポーツや仕事でも、正しい方法で何年も休まず努力をしていたら、いつか結果はついてくるのではないだろうか。

もし僕にすごいと言ってもらえるところがあるとしたら、14年間練習をずっと継続していることだろう。

そんな生活が「辛くなかったか？」と言われると、友達ともっと遊びたい気持ちもあったし、自分でプロになると決めるまでは正直、辛い時も多かった。

でも僕は、もう一度生まれ変わったとしても、また僕に生まれてきたいと思っている。そして、14年間の特訓がなければ、今の僕にはなっていないだろう。

打撃は急所だけ狙う

父親と毎日練習をする中で、攻撃されると痛い場所、つまり急所を自然と学ぶようになった。急所がわかれば、より丁寧に相手の攻撃を避けるようになる。

逆に、攻撃すると自分のほうが痛い箇所もある。当ててはいけないポイントがわかれば、より正確に攻めるようになるし、試合で相手が蹴ってきた時に、向こうの足が痛くなるようにカットすることもできる。

父親から「お前はズル賢い」と言われることがあるが、格闘技においては、自分がやられると嫌なことを対戦相手にするようにしている。

だから、僕が攻撃する時は、ほぼ急所しか狙っていない。人間の一番弱い場所を狙

い続けている。

それがいいのか、悪いのか……。

性格が悪くなっていないか、心配になる時もある。

空手で毎週大会に出場することができたのも、急所を狙い、丁寧に避ける技術が身について、試合で怪我を一切しなかったからだった。

那須川家では疲労は言い訳にならない以上、怪我がなければどんなに連戦でも試合に出場することになる。技術が上がれば上がるほど、より空手漬けの毎日に突入していった。

空手のライバル・南原選手

僕には、空手のライバルがいた。

現在も極真空手で活躍している南原健太選手だ。

僕は、一度千葉県大会で優勝して以来、ずっと空手で良い成績を残すことができていなかった。関東大会ですら1回も優勝できなくて、3位にも入れなかった。小4までは、大会が体重別ではなく年齢別だったからだ。

小柄な僕の前には、大柄な南原選手がいつも立ちはだかった。

南原選手は小2の頃にはすでに体重が60kgぐらいあって、僕の倍のデカさだった。他の子たちと比べても頭ひとつ分は大きくて、僕は何度やっても勝てなかった。

小2か小3の時に、胴廻し回転蹴りで技ありを取って、1回だけ判定勝ちしたことがある。しかし、この時は舞い上がってしまい、そこで燃え尽きてしまった。

今なら燃え尽きるなんて考えられないことだが、せっかくの優勝のチャンスだったのに、次の試合であっさり負けてしまったのだ。

南原選手との試合は、僕の戦い方に大きな影響を与えた。

南原選手との最初の試合は、速攻でバーっと打ちに行った。だけど、体重が倍の相

手には僕の技は全然効かなかった。

「これじゃ、絶対に勝てない！」

空手に限らず格闘技は体がデカい方が有利だ。だから、ほとんどの格闘技では体重別に階級が決められている。

体重差の不利を覆して、南原選手に勝つためにはどうしたらいいか。

それで、父親と練習を始めたのが、ステップを駆使してスピードで出入りしながら「当てさせずに、当てる」という僕の今のスタイルだ。

僕の戦い方の原型は、南原選手を攻略するために生まれたものと言ってもいいかもしれない。また、身長差のある選手と戦うのを苦手としないのも、南原選手のおかげだろう。体重が倍のライバルと戦い続けた経験がある。これは、他の選手にはない強みだと思う。

空手の大会は、小5から体重別になる。一度しか勝ったことがない南原選手にもう

一度勝つには、小4がラストチャンスだった。その先は、試合をする機会がなくなってしまう。

小4の全国大会は京都での開催だった。

前の大会で良い成績を残さないと、全国大会には出られないことになっている。僕の成績はというと、その大会でも南原選手に負けてベスト32。これは全国大会に出られるか出られないかのギリギリのラインだった。

「どうしても出たいんです。お願いします！」

父親と一緒に頼み込んだところ、今までの実績が考慮されて、何とか出場することが決まった。

決勝戦の涙

それからは全てのエネルギーを注ぎ込んで毎日トレーニング。

関東大会では、南原選手とはトーナメントの対戦表で同じブロックにいることが多かった。僕は南原選手に潰されて、前述のように表彰台にも上がれないという状況が続いていた。

全国大会のトーナメント表を見ると、僕と南原選手は別ブロックだった。

南原選手は強い4人が選ばれるシード枠に入っていて、僕はもちろんノーシード。ギリギリで全国大会に出られた僕は、全く期待も、注目もされていない。

そういうアウェーの状況に置かれると、僕の「負けず嫌い」は刺激されるのかもしれない。一気に集中力が研ぎ澄まされたのを覚えている。

「やってやろう！」

実際、その日の僕は神がかっていたと思う。

空手は、第1試合が太鼓の合図で始まる。

僕はその日の第1試合で、相手は地元・京都の優勝候補だった。

しかし、そんなことは関係なかった。太鼓の音とともに攻めまくり、あっという間に一本勝ち。圧勝と言っていい内容だった。

その後も、技を次々と決めて、トーナメントを勝ち上がった。

そして、決勝戦。対戦相手は南原選手だ。

決勝戦の前に、僕はちょっと泣いた。感動なのか、恐怖心なのか。試合前に突然、涙があふれてきた。あの涙は何だったのだろう。理由はわからないけれど、今でもあの涙は鮮明に覚えている。

試合はまさに接戦だった。審判の旗も割れて、延長で決着がつかず、再延長に。それでも決着がつかなくて、最終的には体重判定（極真空手のルールでは、再延長でも決着がつかない場合、10㎏以上軽いほうが勝者となる）で僕が勝った。

全国大会の決勝という最高の舞台で、ライバルに打ち勝てた瞬間だった。

そして、小5から体重別になると、僕は一切負けなくなり、世界大会に出て優勝した。

実は、体重別になってからも、南原選手とはもう一度だけ試合をしている。

空手からキックボクシングに転向することを決めた後、あえて上の階級で試合をしてみようと思い立ったからだ。すると……南原選手はさらにデカくなっていた。

でも、最後だからと正面から打ち合ったら、見事に負けた。でも気分は悪くなくて、「空手はもう十分にやったな」と思えた。

空手に未練が全くないわけではなかったが、その頃には、自分の中でキックボクシングをやりたい気持ちが強くなっていた。

空手からキックへの転向

僕がキックボクシングに魅かれたのは「華」があるからだった。

テレビで「K－1 WORLD MAX」を観た時の衝撃はすごかった。煽りVTRから入場まで全ての演出が派手だし、放送時間はゴールデンタイム。何より、日本はもちろん世界も注目する舞台ということに心が動かされた。

自分もこんな舞台で活躍してみたい。小5の僕は、そう思う気持ちが強くなった。

格闘技で大舞台という意味ではボクシングという選択肢もあったが、僕にはキックボクシングがより魅力的だった。蹴りがあることで、一撃で豪快に倒せる可能性が増えるからだ。

何より空手時代の僕は多彩な蹴りに自信があって、一撃で倒す快感を知ってしまっていた。今はパンチも得意だが、やはり蹴りがきれいに入って相手が倒れるとテンションが上がる。

好きな選手を挙げるなら、やっぱり魔裟斗さん。

魔裟斗さんには必ずライバルがいた。ブアカーオだったり、アンディ・サワーだったり。しかも、一度負けたとしても、魔裟斗さんは必ずその選手にリベンジして勝つ。今

考えてもでき過ぎだと思うほど、試合にストーリーがあった。

しかし、キックボクシングの練習を始めてしばらくすると、K－1のテレビ放送がなくなってしまった。僕が小6の時のことだった。

K－1がなくなるという話は聞いていたけど、僕はずっとテレビで観ていたので、「またやるんだろうな」くらいの感覚。

キックボクシングを続けることに、何の疑問も持たなかった。

ただひとつ言えるのは、あの華やかなK－1中継を観ていなければ、今の僕はなかったということ。

空手を続けていたかもしれないし、ボクシングに転向して東京五輪を目指していたかもしれない。僕にとっては大きな転機だった。

平本蓮（れん）との出会い

小5から始めた、キックボクシングの練習。

空手を辞めてからは所属がフリーになったので、近所のジムに出稽古に行っていた。そんな中、フリーで出場したアマチュアキックの大会で、ムエタイのジムの人から声をかけられた。

「うちのジムは子供がたくさんいるから、一度練習に来てみなよ」

練習に行くと、そのジムには僕と同い年ぐらいの子が本当にたくさんいた。空手と違って、キックボクシングの練習は出稽古で年上の人と一緒か父親とのマンツーマンだったので、そのことだけで嬉しかった。

「ここならみんなで練習して、みんなで強くなれる」

家（千葉県・松戸）からは遠かったが、すぐに通うことを決めた。

ジムの名前は「ケイリバー（K－RIVER）」。場所は東京の足立区で、車で送ってもらうか、ひとりで電車に乗って通った。

練習時間は1回2時間が基本。2時間集中して、スパーリング、ミット、サーキッ

トトレーニングなどに取り組む。

キックボクシングと空手の違いに、最初はかなりとまどった。例えば、空手だと一発一発、力を入れて打つけど、それだとキックボクシングではスピードが遅過ぎる。打ち方やステップなど、全てを修正しなくてはならなかった。

もちろん、空手をやっていた経験が生きる部分も多かった。特に空手の蹴りは多彩だから、僕は他の子にはできない技を使うことができる。だから、ジュニアキックの最初の頃の試合は、とにかく蹴って蹴って蹴りまくるだけ。それで問題なく勝てた。

今から分析すると、キックボクシングに転向したのが早かったのが良かったのかもしれない。中学・高校と空手に専念した上で18歳から転向していたとしたら、クセを直すのが大変だっただろう。

キックボクシングに合わせた修正は、自分で考えて殴り方や蹴り方を変えたり、あとはジムで教わったり。

もちろん父親とも相談しながら、キックボクシングで戦えるようにスタイルを変えていった。

ケイリバーで出会ったのが、今は新生K－1で活躍している、同い年の平本蓮。蓮とはすぐに仲良くなった。

何がきっかけだったか忘れてしまったが、蓮とのスパーリングはヘッドギアなしでバチバチに殴り合うようになった。ヘッドギアをつけると基本、相手のパンチが見づらいので、単純に見やすいからだったような気もする。

全く推奨はできないが（蓮がインタビューで、このスパーリングのせいで勉強の記憶が飛んで成績が落ちたと語っていたが……僕はその関係性を怪しんでいる）、そうやって蓮と殴り合ったおかげで、相手のパンチをもらうことは少なくなった。

蓮の他にも同年代の選手がいっぱいいて、当時のメンバーは、ほぼ全員が何がしかのベルトを持っていた。オールスターと言ってもいいくらい、すごいメンバーだった。

残念なのは、今ではキックボクシングを続けているのが僕と蓮だけになってしまっ

たこと。複雑な事情があるので詳しくは書かないが、ケイリバーが突然なくなったのが大きかったと思う。

楽しく強くなれた理由

小6の夏休みは、1日6時間練習した。

ジムに行って、練習して、休憩して、蓮とベイブレードをして、また夜に練習して。オーバーワークだったけど、子供の回復力だからなんとか平気だったのだろう。

毎日毎日、練習はハードだけど楽しかった。学校の部活よりも遥かにキツいことをしていたけど、本当に「楽しかった」という印象しかない。

同世代のトップクラスのメンバーがみんな一緒にがんばっているので、「負けられない」と思うし刺激になった。

ジムにはタイ人トレーナーもいたが、プロを専門で教えているので、僕らが見てもらうことはなかった。

会長はミットを持つのがうまくて、かなり追い込まれた記憶がある。

父親もよくジムに来てくれた。父親が僕とやった練習を伝えると、会長が「じゃあみんなもやってみよう」と言って、ジムのメニューに取り入れられることもよくあった。

ケイリバーに通えたのは、ジムがなくなってしまったので、1年弱だった。ただ、ハードに楽しく練習できたこともあり、この期間に多くのタイトルを獲得できた。

プロになってから実感したことだが、「アマチュアの頃から注目していたよ」と声をかけてもらうことが多い。どうやら、この頃からキックボクシング関係者のあいだで「那須川天心」は、少し話題になり始めていたらしい。

TEAM TEPPENの誕生

でも、諸事情でケイリバーがなくなってしまったので、僕は練習場所を失ってしま

った。

フリーになったばかりの時のように、自宅で父親と練習をしながら、近所のボクシングジムで、サンドバッグなどをやらせてもらっていたら、また運命の出会いがあった。

ジムの会長から、「土日に体を動かしにきているボクシング経験者がいるから、教えてもらったら」と紹介されたのが、現在も僕のトレーナーをしてくれている岡本祐爾さんだった。

岡本トレーナーは元選手で、当時はまだ人を教える経験はなかったが、すぐに「君、良いね」と声をかけてもらって、毎週パンチを教えてもらえるようになった（岡本トレーナーとのエピソードは、本人のインタビューが収録されているので、そちらを参照してほしい）。

そうこうしているうちに、父親と岡本トレーナーと僕の3人で、「TEAM TEPPEN」としてやっていこうという話になった。

現在はTEPPEN GYM（2016年11月オープン）があるが、当時のTEAM TEPPENの練習は、週に1回、自宅近くの体育館を借りて行っていた。それ以外の日は、別のジムに出稽古か自宅で父親と練習。

中学生になった僕は、次第にプロを意識するようになっていた。

4年制の高校へ進学

中2の終わりぐらいになると、学校では「将来、どうするか？」という話が出てくる。

僕は、出稽古先のひとつだったジム「TARGET」に所属してプロのキックボクサーになることは決めていた。しかし、どの高校に進学するかには、少し迷いがあった。

なぜなら、僕が参加したいTARGETのプロ練習は、13時スタートだったから。普通科に行っていたら、練習時間に間に合わない。

試し読みはここまでです。